



英語科における 小中連携心得

—「生徒の必要を満たす」連携を目指して—

筑波大学附属中学校 蒔田 守



これまででは中学校が英語学習の導入段階であったことから、中学校では特に音声によるコミュニケーションを重視し、学習指導要領の教科目標には「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」とされていた。しかし、今回の学習指導要領改訂により、小学校に外国語活動が導入され、「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語によるコミュニケーション能力の素地が育成されることになった。このため、中学校学習指導要領には、小学校の外国語活動ではぐくまれた素地の上に、「聞くこと」「話すこと」に加え、「読むこと」「書くこと」の4技能をバランス良く育成することの必要性が強調されている。状況は絶えず変化しているが、このような状況下で「小学校の指導をふまえた」中学での指導について考えてみたい。

中学校へ入学してくる 新入生が変わった

近年、小学校で行われる外国語活動に対して、中学校教師からは様々な意見や感想が述べられてきた。確かにここ何年間かで入学してくる中学1年生の英語に対する構えに大きな変化があったようだ。

まず、新入生の英語に対するハードルは確実に低くなっている。簡単な挨拶レベルでは、生徒は全く物怖じしない。Nice to meet you. とこちらが挨拶すれば、大きな声で Nice to

meet you, too. と立派に応答する。また英語を聞き取ることに慣れているのか、音作りも上手な生徒が増えた。たとえば、出席確認の返事として“Here.”と言わせたとき、数年前は十分な音作りができずに、唇を丸めて「ヒュー」に似た返事をする生徒が多数見られた。しかし、この2年間1年生を指導してみて、聞いた音“Here.”に近い音を出せる生徒が多くなったことに驚かされた。このように、新入生の英語音声に対する「慣れ」は確かに感じられる。ただし、これがすべて小学校での英語活動の成果であるかどうかは定かでない。年間数時間の英語活動で、これほど大きな変化が生じるとは思えないからだ。

一方で、新入生の英語に対する期待感や新鮮な気持ちは薄れているようだ。かつて見られた、初めて学ぶ新しい教科「英語」に対する、あの憧れやキラキラ輝いていた瞳はどこへ行ってしまったのだろうか。小学校の先生方を悪者にするつもりはないが、つついこんな愚痴が出てしまうのが中学に入学した生徒を担当した教師の偽らざる気持ちではないだろうか。

現状をふまえて、 中学教師が肝に銘じるべき事柄

かつての新入生と様子が異なっているからといって、小学校の先生に文句を言っても始まらない。ましてや「小学校で何やってきた

んだ!」と、子どもたちを叱責してはならない。まず、中学校教師は以下の現状を知るべきである。

①小学校で経験があっても、入学当初の新入生に正確なプロダクションを期待しない

総合学習の一部である国際理解活動の英語活動であれ、外国語活動であれ、小学校で児童は英語に慣れ親しむこと、積極的に人に関わる態度を育成することは求められているが、中学校の英語授業で行うレベルのプロダクションは訓練されていない。

また、小学校での指導に幅があることも事実で、学校や指導者による差が大きい。特に特区の小学校出身者とそれ以外の学校出身者が混在する中学校では、見た目の勢いで「今年はいける」と判断を誤らないよう注意する必要がある。英語にほとんど触れず、ローマ字も2時間程度学習しただけの生徒が混在していることを忘れてはならない。

②小学校の英語活動に中学生のようなスキルは期待しない

小学校では英語に慣れ親しむことを主眼としているので、当然中学校レベルのスキル指導を期待してはならない。たとえば、新入生はアルファベットを見慣れてはいるが、きちんと音声指導を受けたわけではないので、正しく文字の音を発音することはできない。だから、今まで通り我々が中学できちんと教えるなければならない。生徒が知っていると思っている分、従来の指導を改善し工夫する必要があるが生じてきたということである。

昨年、ある生徒が「先生、英語には『ジー』と発音する文字が2つあるのですか」と質問してきた。理由を尋ねてみると、「g と z が同じ音に聞こえる」とのことだった。このことで、小学校での体験をきちんと整理しなければならぬことに気づいた。

また、当然のことながら、文字も丁寧に書

くことができない。アルファベットの構成要素が、円○、斜線×、直線□であることを教え、漫然とペンマンシップをなぞるだけでなく、美しい文字が素早く書けるように訓練するのは、やはり中学教師の仕事である。

③「異なるもの」へのハードルの低さは期待できる

かつては ALT を見て戸惑いを見せていた児童生徒が多かったが、ALT を常駐させている小学校も多く、異文化への抵抗感は明らかに減少している。同時に言葉そのものへの興味・関心や感性の高さは小学校で培われることを期待して良いだろう。

小学校の授業を見ると 「生徒の必要や自分の必要」が見えてくる

数年前に小学校の英語活動について議論しているときに、「蒔田さん、あなた、結局いくつの小学校授業を参観したことがありますか」と、ある大学の先生から指摘された。実は当時、一度も小学校の授業をライブで見たことがなく、それまでの知識や経験から常識的に考えた意見を述べていた。しかし、そのような私を含めた筑波大学附属中学校の英語科メンバーは昨年度大きな転機を迎えた。それは、実際に小学校の授業を生で見る機会を得たからだ。そこで我々は以下の「事実」に気づかされた。

①中学校の英語授業は小学校の国語授業に支えられている

小学校の授業を参観する前、私たちは中学校の英語指導は中学校から始まると考えていた。しかし、それは誤りとだと気づいた。私たちの中学校英語授業は、小学校国語授業の上に成り立っていると今は考えている。小学校で行われている、聞く指導、話す指導、考える指導、そして読む指導や書く指導があってこそ、中学での指導が可能となり、小学校

のおかげで我々が楽しく英語を教えることができるようになった。

確かに中学校で英語のいろはから教えていることは事実だが、語学教育の観点からすれば、小学校での国語授業抜きには中学英語授業を論じられない。我々中学校の英語教師が行なっていることは、小学校で培われた豊かな土壌に英語の種をまき、育てているのだ。そこで「小学校に足を向けて寝られないね」という結論になった。とはいえ、中学校で英語を教えることの価値は減ずることなく、その重要性に変わりはない。このように考えると、小中の連携は目新しいことではなく、既に行われていたと言えるだろう。

②小学校の先生方に学ぶことが山ほどあった

一般的に小学校の先生方は、心の底から子どもをほめて、安心させ、自信をつけさせながら育てている。また、子どもをそのままの存在として受け止めようとしているようにも思える。そのためだろうか、子どもを前にしたときの小学校の先生方の笑顔がとても自然で素敵なおことに気がついた。

教師の対応の差は、子どもの発達段階に応じた必然かもしれない。中学・高校と進むにつれて、教師と生徒との関わりは変化せざるを得ないのだろう。しかし、それにしても我々は正しい英語を使わせるために、生徒のミスを見つけては訂正することに力を注ぎすぎていないだろうか。小学校では、児童に「日本語が通じない」こともあると聞く。そんな小学生の集団に対して、粘り強く取り組む先生方を見ていて、私は大らかでありたいと思った。以上が「まず小学校の授業を見る」ことをお薦めする理由である。

小学校の先生にも卒業生の 中学校での授業を見ていただく

加えて小学校の先生方に中学での英語授業

を見ていただいた。すると小学校の先生方からは、「小学校では光らなかったあの子が、あんなに元気に活躍していて嬉しかったです」との感想を得た。小学校時代と大きく違って見える生徒が何人かいるという。それも「あんな笑顔は見たことがない」とびっくりなさっていた。中学に入って、新しい自分を見つけることができたのかもしれない。中学教師として、自分たちの営みが何人かの生徒に新しい道を示していることを聞かされて、勇気づけられた。

このように、小学校での活動がなかなか定まらない現状をふまえ、授業参観から始めることが实际的だと思う。そこから目の前の生徒に必要なことが自ずから見えてくるはずだ。

「目の前の生徒の必要を満たすこと」 を大切にした連携

小学校の外国語活動に対する取り組みは地域により千差万別で、特区として華々しい研究成果を発表してきた学校がある一方、大半の学校ではようやく研究体制を整え始めた段階のようだ。この夏は各地で研修会が開かれ、多くの先生方が熱心に勉強している様子が見られた。今後このような小学校の先生方の努力が、どのような形に表れてくるか楽しみである。中学教師としては地域の動きから目が離せない。

しかし、これからしばらくの間は様々な試行錯誤が続き、毎年状況が変化することだろう。こんな時だからこそ、互いの状況を知って、「目の前の生徒の必要を満たすこと」を大切にした連携を行いたい。

様々な背景を持った学習をした新入生に適した中学入門期を創造することが私たち中学教師の新しい仕事として加わった。生徒の成長と自らの授業が改善されることを期待しながら中学校英語教師を楽しんでいこう。